様式Ｆ－１９

# 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2011～2012
課題番号：23700721
研究課題名（和文）　イギリスのホッケー普及過程におけるスポーツ用具業者の役割に関する研究
研究課題名（英文）　The role of sporting goods manufacturers during the spread period of the organized game of hockey in Britain
研究代表者
秋元　忍（AKIMOTO SHINOBU）
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号：５０３４６８４７

研究成果の概要（和文）：本研究では、スポーツ用具業者がイギリスのホッケー普及過程において果たした役割について検討を行った。スポーツ用具業者は、19 世紀末のゲームの組織化を契機としてホッケー関連用具製造に参入し、大量の用具を市場に提供した。またホッケー用具の供給に注力した複数の用具業者は、プレイヤーの満足度を高める工夫を試みていた。ホッケーのゲームの多様な普及を一面で支えていたのは、彼らが供給した用具であった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to consider the role of sporting goods manufacturers during the spread period of the organized game of hockey in Britain. With the organization of the game in the late nineteenth-century they went into hockey goods business and brought enormous amount of their products to the market. Some manufacturers focused on supplying hockey goods and tried to increase player's satisfaction. It was the goods they supplied that supported a diversity of diffusion of the game of hockey.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 総計 | 1,500,000 | 450,000 | 1,950,000 |

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ史
キーワード：ホッケー　近代スポーツ　スポーツ用具業者

## １．研究開始当初の背景

19 世紀後期イギリスで組織化され、ルールの統一化が達成されたスポーツ、いわゆる近代スポーツの普及に関する説明はいまだ十分ではない、という先行研究の指摘を踏まえ、本研究者は、これまで研究対象とされることが少なか

ったスポーツの１つであるホッケーに着目し、そのイギリスにおける普及過程に関する研究を継続してきた。その結果、ホッケーの統括組織関係者は 20 世紀初頭に至ってもゲームの大衆化を志向していなかったこと、統括組織が禁止、非難していた男女混合ホッケーやリーグ戦を実施していたクラブが全国的に存在し、消滅するどころか増加傾向にあったこと、統括組織加盟、非加盟の別を問わず企業の支援を受けた企業内ホッケークラブが広く存在し、地域的なゲームの普及に重要な貢献をなした例もあったことなど、ホッケーの場合も、組織化以降の普及は多様な実相を伴うものであったことを明らかにすることが出来た。しかしながら、こうした成果を得た一方で、当初の研究対象には含まれていなかった、新たな歴史的事実が見出された。それは、ホッケーのゲームの普及過程は、スポーツ用具製造業者によるホッケー関連用具の大規模な供給が展開された時期でもあった、ということであった。これらの業者の中には、ホッケーのみならずスポーツ関連用具を広く、大量に製造し、国内外に広く知られた大規模工場から、ホッケーに使用するボールの生産を専門に請け負う小規模個人商店までが含まれていた。これらの業者の関連史料は、むしろプレイヤー以上に冷静な眼差しをホッケーという「市場」に向けていたがゆえに、また製品の納入先を継続的に記録に残すことが必要であったがゆえに、これまでの研究が関心を寄せてきた「ゲームの実施状況」とは異なる観点から、ホッケーのゲームの普及過程の特徴を克明に浮かび上がらせる可能性がある。以上の着想に基づき、本研究では、イギリスのホッケー普及過程におけるスポーツ用具製造業者の役割に関する研究を行うことにした。

２．研究の目的

本研究は、イギリスのホッケー普及過程におけるスポーツ用具製造業者の役割について検討することを目的とした。この目的を達成するため、次の２点の研究課題を設定し、それぞれ単年度の研究課題とした。(1) スポーツ用具製造業者のホッケー関連用具供給戦略と供給実態の解明(平成 23 年度課題)。(2)特許に見るスポーツ用具供給業者のホッケー関連用具供給の意図の検討(平成 24 年度課題)。

また本研究では、国内に存在した２つの組織的なホッケーのゲームが、一方の制度的消滅により統合された 1895 年から、戦争により一時ゲームの中断を余儀なくされた 1914 年までをホッケーの普及期として設定し、研究対象年代とした。

３．研究の方法

(1)分析の観点

スポーツ用具業者のホッケー関連用具供給については、以下の３点から検討を行った。①ホッケー関連用具供給の展開の背景、②ホッケー関連用具市場の評価、③ホッケー関連用具供給の実態。

特許に見るスポーツ用具供給業者のホッケー関連用具供給の意図については、以下３点の研究課題を設定した。①ホッケー関連特許の全容、②スポーツ用具業者のホッケー関連特許の取得状況、③特許取得業者によるホッケー関連用具の製品化。

(2)史料について

2011 年度に史料調査のためのイギリス研修旅行を実施し、スポーツ用具業界誌３誌(① *The Sports Trades Journal*、② *The Sports Trader*、③ *The Bag, Portmanteau and Umbrella Trader and Fancy Leather Goods and Athletic Trades Review*) 掲載記事、イギリス特許抄録、ホッケー関連雑誌・書籍、地方紙掲載記事等を調査した。これらを本研究の主要史料とした。

４．研究成果

(1) <u>1914 年以前のイングランドにおけるスポーツ用具業者のホッケー関連用具供給</u>

スポーツ用具業者は、19 世紀末のゲームの組織化を契機としてホッケー関連用具製造に参入し、大量の関連用具を市場に供給した。個人の好み次第であったホッケー

用具は規格品となり、製品名を伴って流通した。1908 年から 1909 年にかけて、スティック、ボールともにその種類が豊富化し、1909 年には 192 種のホッケースティックが 32 の業者により製造される段階にあった。1909 年に最も多くの種類のホッケー用具を製造していた業者は、ロンドンの T. H.プロッサー（スティック 16 種）と、ケントの A.リーダー（ボール 10 種）であった。フットボールのボールの製品名数が、サッカーとラグビーを合わせて 370（1908 年）、307（1909 年）であったことと比較しても、単一種目のホッケーのスティックの豊富さは注目される。またラクロスについては、ボール、クロスほかすべての製品を合わせても、1908 年、1909 年ともにその製品名数は 12 のみであった。ホッケーは、同シーズンの他のボールゲームと比較しても、多様な用具供給を伴いつつ普及をみたゲームであったと評価することができる。これらの供給を支えたのは、ゲーム実施の拡張と、業界誌に典型的に見られた有望な新市場という評価であった。幅広い価格帯のスティック、ボールが掲載された用具業者の製品カタログは、統括組織加盟クラブ一覧以上に、ホッケーというゲームの普及の特徴を雄弁に語っていた。平均的なフットボーラーよりも金銭的に余裕があるとされた人々から、企業労働者や学校の生徒たちまで、ホッケープレイヤーの拡がりを用具業者は認識していた。彼らが柔軟な戦略により供給した用具が、ホッケーのゲームの多様な普及を一面で支えたのである。

(2) 1914 年以前のイギリスにおけるスポーツ用具業者のホッケー関連特許

1914 年以前のスポーツ用具関連特許におけるホッケー関連特許の総数は 45 件であった。年代別にみると、その数は 1890 年代、特に 1890 年代後半以降増加するようになり、1910 年代には減少していた。用具別ではスティック、特にその握りに関する特許が多く、ボールに関する特許は 7 件のみであり、ホッケー用具に適用可能な新規開発技術は、スティックに、そして特にその握りに集中していた。ホッケー用具のみの特許は 4 件であったが、そのうち 2 件は、1900 年代にスティック打球面の保護を意図した専門的な用具開発が行われていたことを示していた。1880 年代後半から開始された特許取得業者によるホッケー関連用具の製品化は、スティックの握りやスティック打球面の保護について進展が見られ、ホッケー用具の開発と製品化に注力したスポーツ用具業者により 1910 年代においても継続されていた。スポーツ用具業者は、ボールやスティックといった規格品をホッケー関連用具の市場に大量に投入しただけではなく、主としてスティックの握りや打球面の改良という、使い手の満足度を高める工夫を 19 世紀末から継続しつつ、新規開発技術の一部を特許として取得し、製品化していた。こうしたスポーツ用具業者の意向は、例えば女性用のスティックにおける手の痛みの緩和が女性たちのゲームの参与を容易にすると考えられるように、ホッケーのゲーム普及に少なからず影響を及ぼしていたと言える。この点をホッケーの担い手が残した言説から検討することを、残された課題として指摘しておきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

(1) 秋元忍、「1914 年以前のイングランドにおけるスポーツ用具業者のホッケー関連用具供給」、『身体行動研究』、第 1 巻、2012 年、pp.23-30、査読なし。

(2) 秋元忍、「1914 年以前のイギリスにおけるスポーツ用具業者のホッケー関連特許」、『身体行動研究』、第 2 巻、2013 年、pp.17-29、査読なし。

６．研究組織

(1) 研究代表者
秋元　忍（AKIMOTO SHINOBU）
神戸大学・大学院人間発達環境

学研究科・准教授
研究者番号：５０３４６８４７
(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし